

小水城周辺遺跡 I

大野城市文化財調査報告書

— 第 45 集 —

1995

大野城市教育委員会

序

本市の上大利地区は牛頸地区と共に、古代の須恵器窯跡群の所在する場所として著名の他、文化財の多い地域として有名です。今回県道拡幅工事に伴って発掘調査した所は西暦664年に造られたと『日本書紀』に記された水城跡の一連の施設である上大利小水城のすぐ北側です。水城と関連する遺跡ではないかと考えていたところ、それよりもだいぶ新しい平安時代の遺跡でした。遺物としては県内ではそれほど出土例の多くない八稜鏡が見つかりました。丘陵間の谷間に立地する遺跡ですが、遺跡の性格の究明を始めとして、遺跡の規模、内容等今後解明を目ざさなければならないことは多くあります。本報告書がそのための第一歩となり、またその成果が市民に還元されれば幸いです。

最後に、費用の負担を始めとして調査に全面的にご協力いただいた福岡県那珂土木事務所を始め、地元の皆様、整理作業に指導、助言をいただいた県、各市の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成7年12月25日

大野城市教育委員会

教育長 堀内貞夫

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が福岡県那珂土木事務所より委託を受けて実施した小水城周辺遺跡発掘調査の報告書である。
2. 遺物写真は、岡紀久夫の撮影による。
3. 遺物実測は岸野和子、舟山良一が、製図は岸野と河鍋洋子、拓本は井手美智子が担当した。
4. 本書の執筆、編集は舟山が担当した。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	3
III. 調査の結果	3
1. 調査概要	3
2. 調査結果	
i. 掘立柱建物	3
ii. 土坑	6
iii. 溝状遺構	8
iv. その他の遺構と遺物	12
IV. まとめ	
1. 遺構の年代について	15
2. 八稜鏡について	16
3. 遺跡の性格について	16

I. はじめに

本調査は大野城市教育委員会が福岡県那珂土木事務所からの受託事業として実施したものである。

那珂土木事務所は現在県道31号線（通称5号線）の拡幅工事を行っている。31号線は久留米市と福岡市を結ぶ幹線道路で、交通量の多い道路であるが、大野城市域は市内中央よりやや南部の狭い部分を東西に貫通しており、その距離は約1.05km程である。しかし、水城土塁の西側取り付き部からやや西を通り、上大利の小水城跡や牛頸窯跡群で最も古い窯跡であった野添6号窯跡所在地の東側を抜けていくなど、埋蔵文化財の多い地帯を通っている。このため、那珂土木事務所から拡幅に伴う文化財への影響について打診があった時は十分に検討を行った。しかし、拡幅予定部分はほとんど開発された場所であったり、池の部分であったり、試掘調査を実施しなければならない部分は小水城の北側の水田部分だけと考えられた。試掘調査によって、小水城に関連する何らかの遺構（特に濠など）の存在が期待されたが、土塁からやや離れていることもあってか、それらは検出されず、11世紀頃かと推定される土師器、小土坑、溝などが検出された。このため、工事に先だって発掘調査が必要な旨を那珂土木事務所に回答した。

発掘調査は用地買収の進捗によって実施したため、平成5年度、6年度の2年度にわたり、整理作業は平成7年度に行った。遺跡名については本来であれば小字名を使用するが、本遺跡については特別史跡に指定されている小水城のすぐ近くにあるということから小水城周辺遺跡とした。

本市教育委員会歴代の調査体制は以下の通りである。

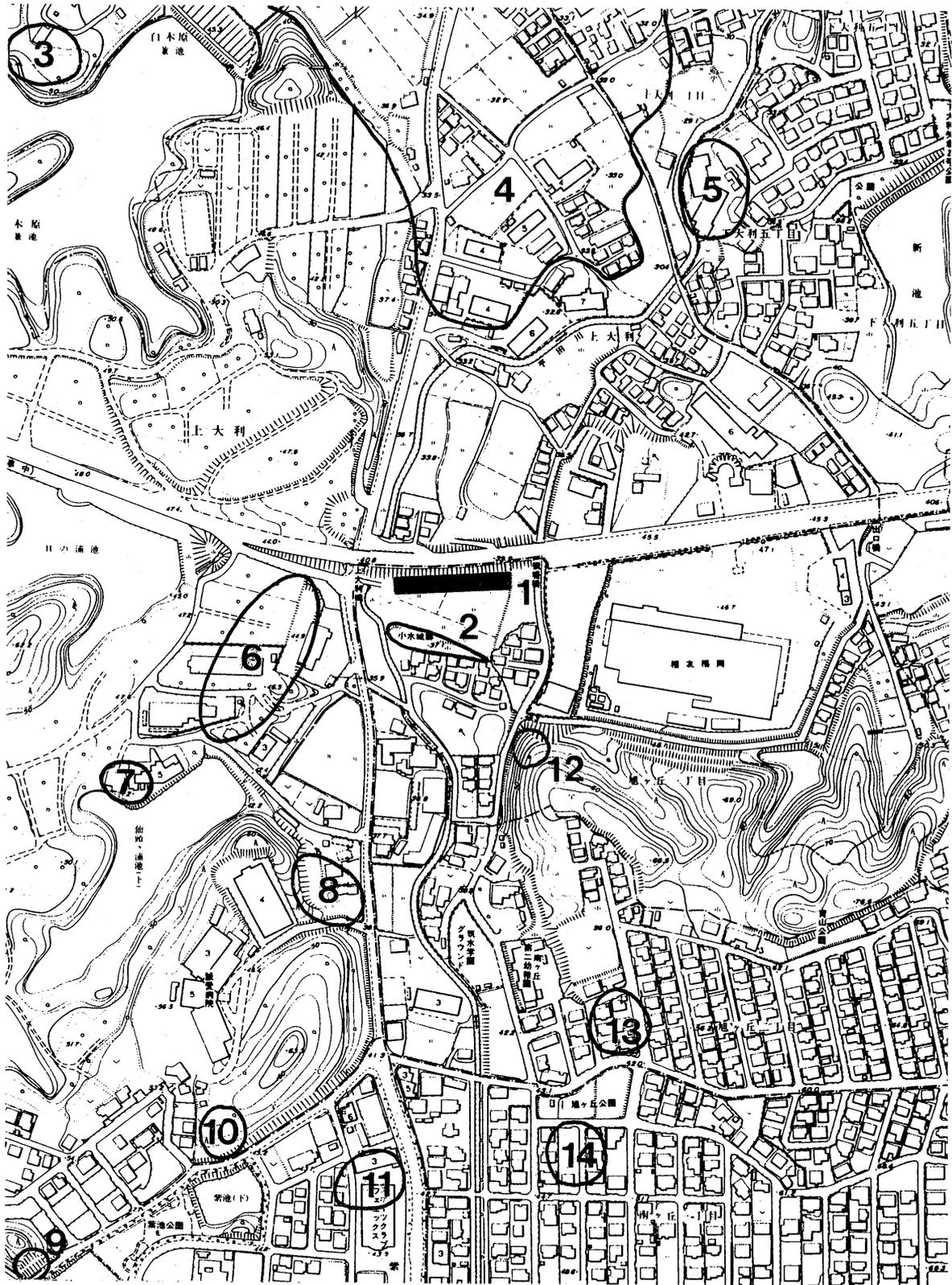
教育長	久野 英彦	文化担当課長補佐	係長	中村 茂
	堀内 貞夫			高橋 裕司
教育部長	末増 治	同 主査	吉田 悟	
	池田 嘉門	技師	舟山 良一	
	香野 信儀		向 直也	
社会教育課長	關 隆昭		徳本 洋一	
	赤星 健彦		石木 秀啓	
		同 嘱託	岸野 和子	

調査および整理作業参加者

池田タツヨ、内山マサ子、大海雅子、岡本妙子、河野房子、川辺照子、川辺美喜子、木寺真理子、佐藤利恵子、篠原純子、島崎真知子、高木冴子、高木幸子、田中フミ子、中山チエ子、中山三千代、那波幸子、原田敬子、福岡麗子、藤島ミトシ、藤田和子、船越エミ子、前田チエ子、満富スエ子、山下洋子、吉嗣波津子

井手美智子、河鍋洋子、町井裕子、松岡信子、牟田昌子、山本恒子

遺物整理作業に当たっては太宰府市教育委員会山本信夫、狭川真一、山村信栄、中島恒次郎の各氏に協力を得た。厚く感謝の意を表したい。



第1図 小水城周辺遺跡位置図 (1/5,000)

- | | | | | |
|-------------------|----------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 小水城周辺遺跡(今回調査地) | 2. 小水城跡 | 3. 梅頭窯跡 | 4. 上園遺跡 | 5. 出口遺跡 |
| 6. 野添窯跡群 | 7. 野添窯跡群 | 8. 野添窯跡群 | 9. 野添窯跡群 | 10. 野添窯跡群 |
| 11. 平田窯跡群(F地点) | 12. 谷蟹窯跡 | 13. 大浦窯跡群 | 14. 大浦窯跡群 | |

II. 位置と環境

小水城周辺遺跡は福岡県大野城市旭ヶ丘1丁目地内に所在する。旭ヶ丘という地名は近年の町名変更によって名づけられたもので、本来は大字上大利であった。牛頸山から派生した低丘陵にはさまれた谷部に当たる。

周辺に遺跡は数多くあるが、古墳時代中期以降のものが多く、それ以前のはほとんど知られていない。牛頸窯跡群に含まれ、その北東隅に当たる。同窯跡群で最も古く、ⅢA期の標式とされる野添6号窯、ⅢB期の標式とされる野添9号窯があった野添窯跡群(第2図6)^(註1)、瓦陶兼業窯の大浦2号窯があった大浦窯跡群(同13・14)^(註2)、その他調査、報告された窯跡は野添11～13号窯(同8)^(註3)、平田F-1窯(同11)^(註4)などがある。集落としては一部弥生時代のものもあるが、主に5世紀後半から平安時代までの遺構が知られる上園遺跡(同4)^(註5)、古墳時代、奈良時代の遺構の知られる出口遺跡(同5)^(註6)などがある。また、小水城は上大利土塁とも呼ばれ、いわゆる水城跡の西の谷をせき止める形で今もその姿を横たえる(第1図)。さらに西にある大土居水城、天神山水城、そして水城大堤は大野城の土塁とともに大宰府を守る長大な羅城を形成する。

〈註1〉『野添・大浦窯跡群』福岡県教育委員会 1970

〈註2〉同上

〈註3〉『野添窯跡群』大野城市教育委員会 1987

〈註4〉『牛頸平田窯跡-F地点-』大野城市教育委員会 1982

〈註5〉『上園遺跡Ⅰ』、『上園遺跡Ⅱ』大野城市教育委員会 1986、1987

〈註6〉『出口遺跡』大野城市教育委員会 1989

III. 調査の結果

1. 調査概要

用地買収の都合により、2年度にわたり、かつ1年度目の調査も排土を反転して行った。このため全景写真は撮影できず、3回に分けた。

検出された遺構は掘立柱建物1棟(SB01)、土坑3基(SK01～03)、溝状遺構5(SD01～05)その他ピットである。出土遺物としては、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、陶磁器、銅鏡、鉄器があげられる。銅鏡は遺構検出面からの出土で、遺構には伴わなかった。

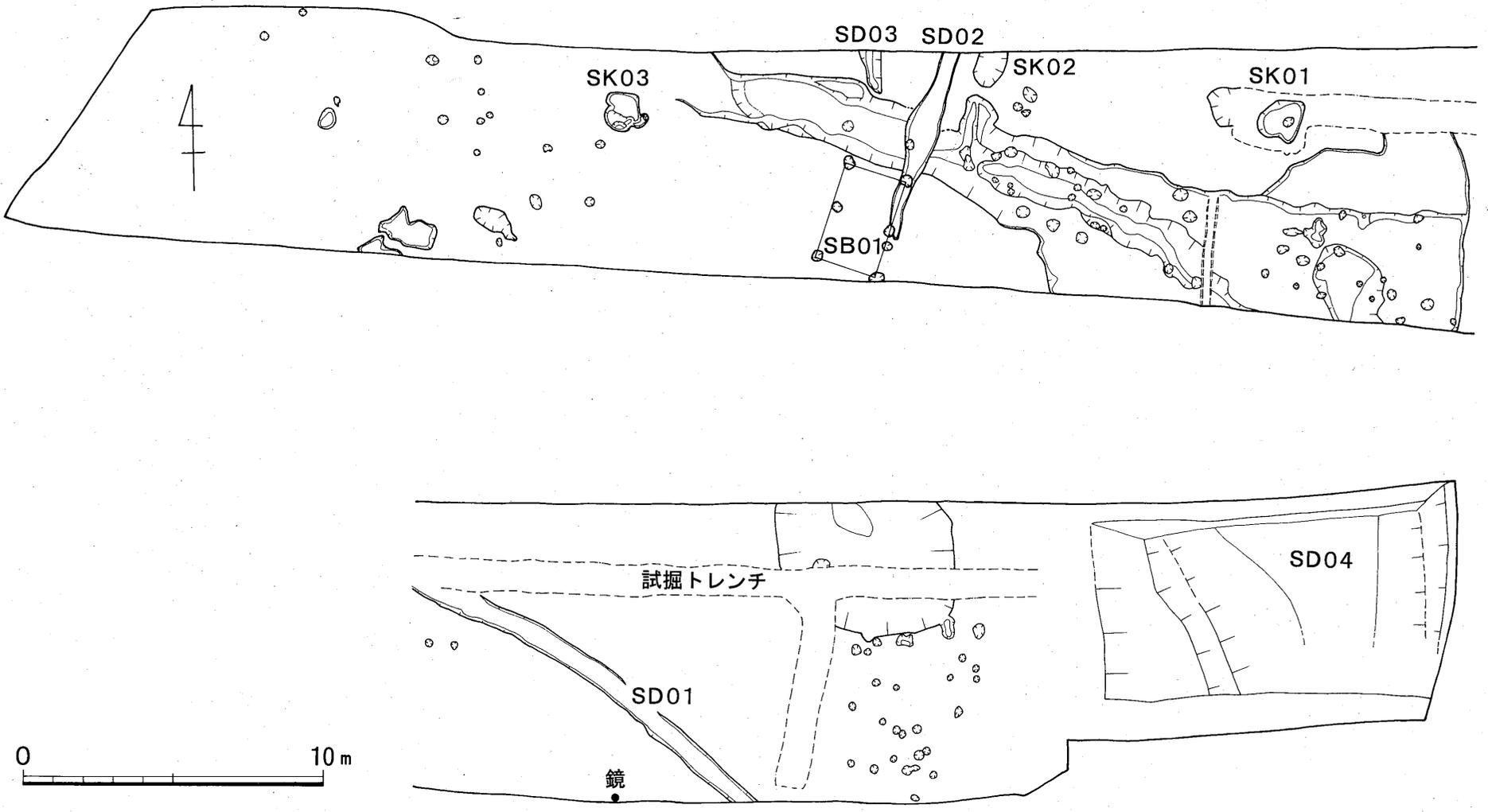
以下、各遺構ごとに記述したい。

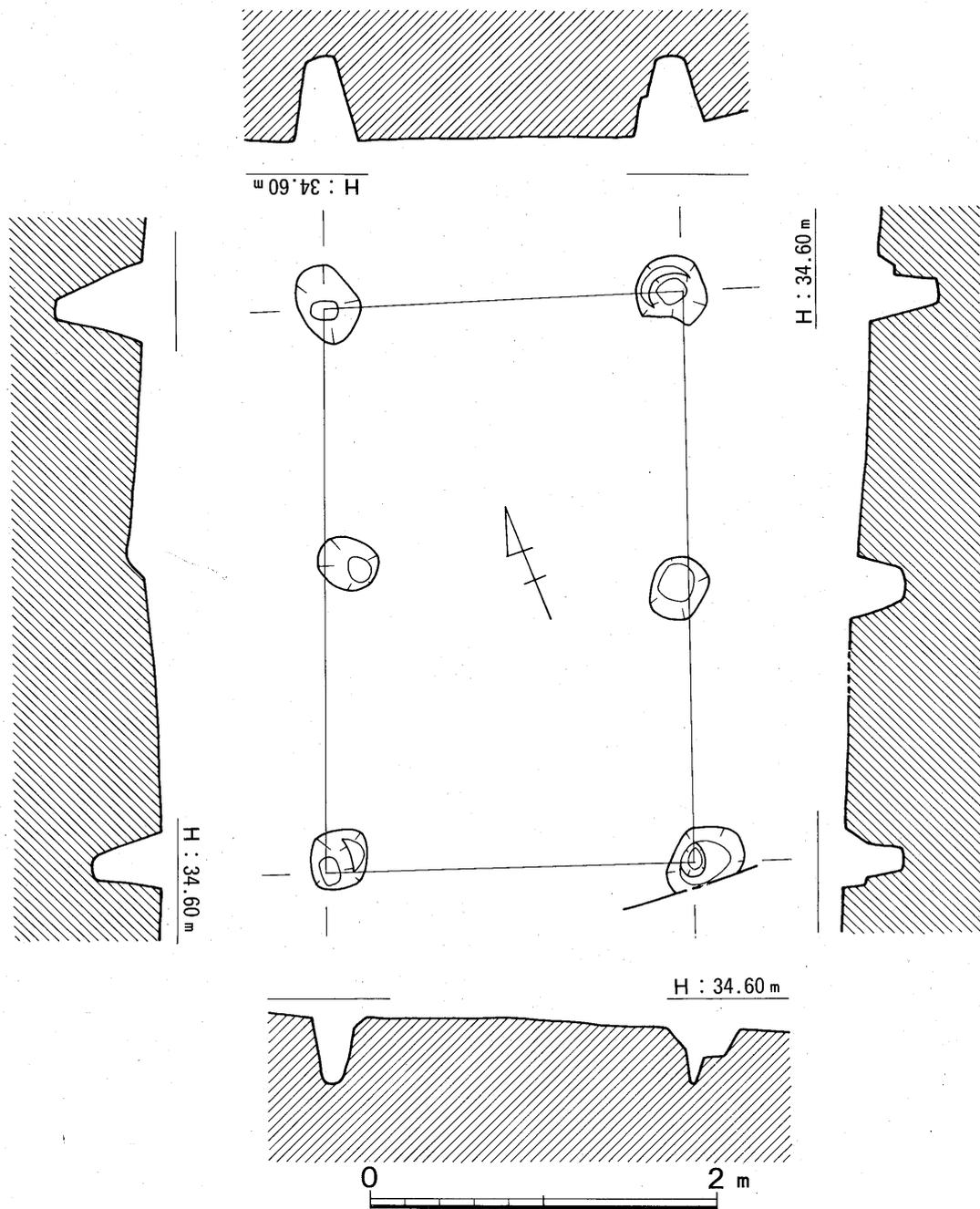
2. 調査結果

i. 掘立柱建物

SB01、(第3図、図版2-(3))

第2図 小水城周辺遺跡遺構配置図 (1/200)





第3図 SB01実測図 (1/40)

発掘区中央部よりやや西寄りの地点で検出されたものである。主軸はN-21°-Eにとり、1間×2間の規模である。桁行は西側3.25m、東側3.3m、梁行は北側で2.4m、南側で2.15mを測る。柱穴は長径が30~40cmの楕円形または隅丸方形状を呈し、深さ30~50cmである。北東隅の柱穴はSD02埋土下で検出されたため、それより古いことになる。

各柱穴から小破片、少量ながら、須恵器、土師器、黒色土器が出土している。

出土遺物 (第4図)

土師器

皿 (1) P13から出土した小破片で、磨滅が激しく調整が詳らかではない。復元口径10.0cm、器

高1.0cmほどの大きさになる。底部はヘラ切りで板状圧痕が残る。全体をナデで仕上げる。

ii. 土坑

SK01 (第5図、図版3-(2))

発掘区ほぼ中央で検出されたものであるが、試掘調査時に既に判明していたものである。試掘時に遺構をより明確にするため、やや深掘りし、そのため本来の検出面よりやや深い部分で検出した。平面形は不整形で、断面形もそれほど整ったものではない。東西長、南北長ともに1.4mほどで、深さ約0.3mを測る。床面にやや不明確な円形の浅いピットがある。

規模の割には出土遺物が整理箱1箱分と多い。土師器がほとんどであるが、黒色土器も少量含まれている。床面からは浮いた状態であった。

出土遺物 (第4図、図版5)

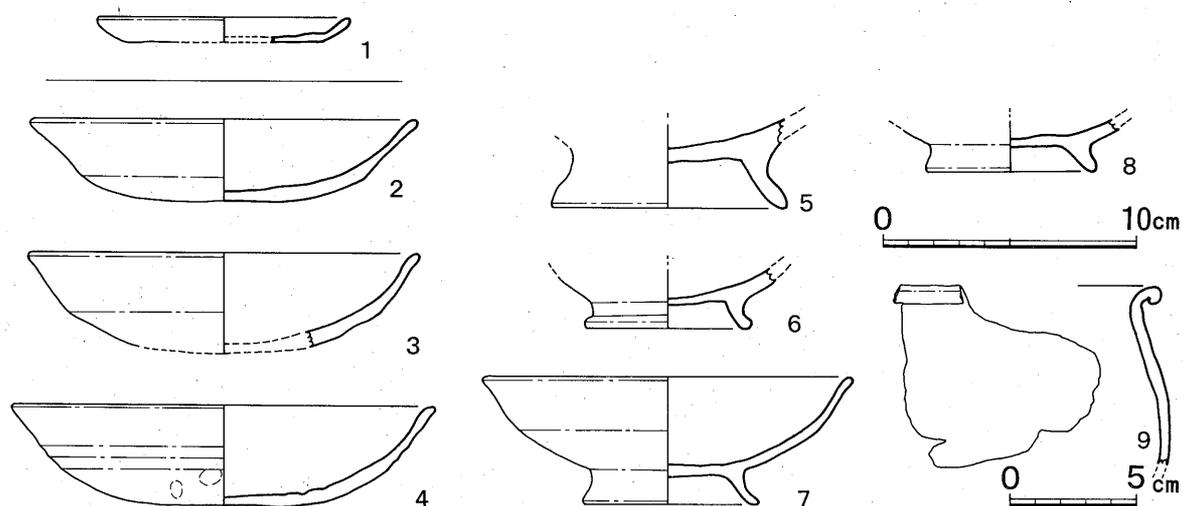
土師器丸底杯が7~8個体、高脚器種の脚部1、甕1、黒色土器の椀1、弥生土器の高杯脚部と思われるもの1が出土した。

土師器

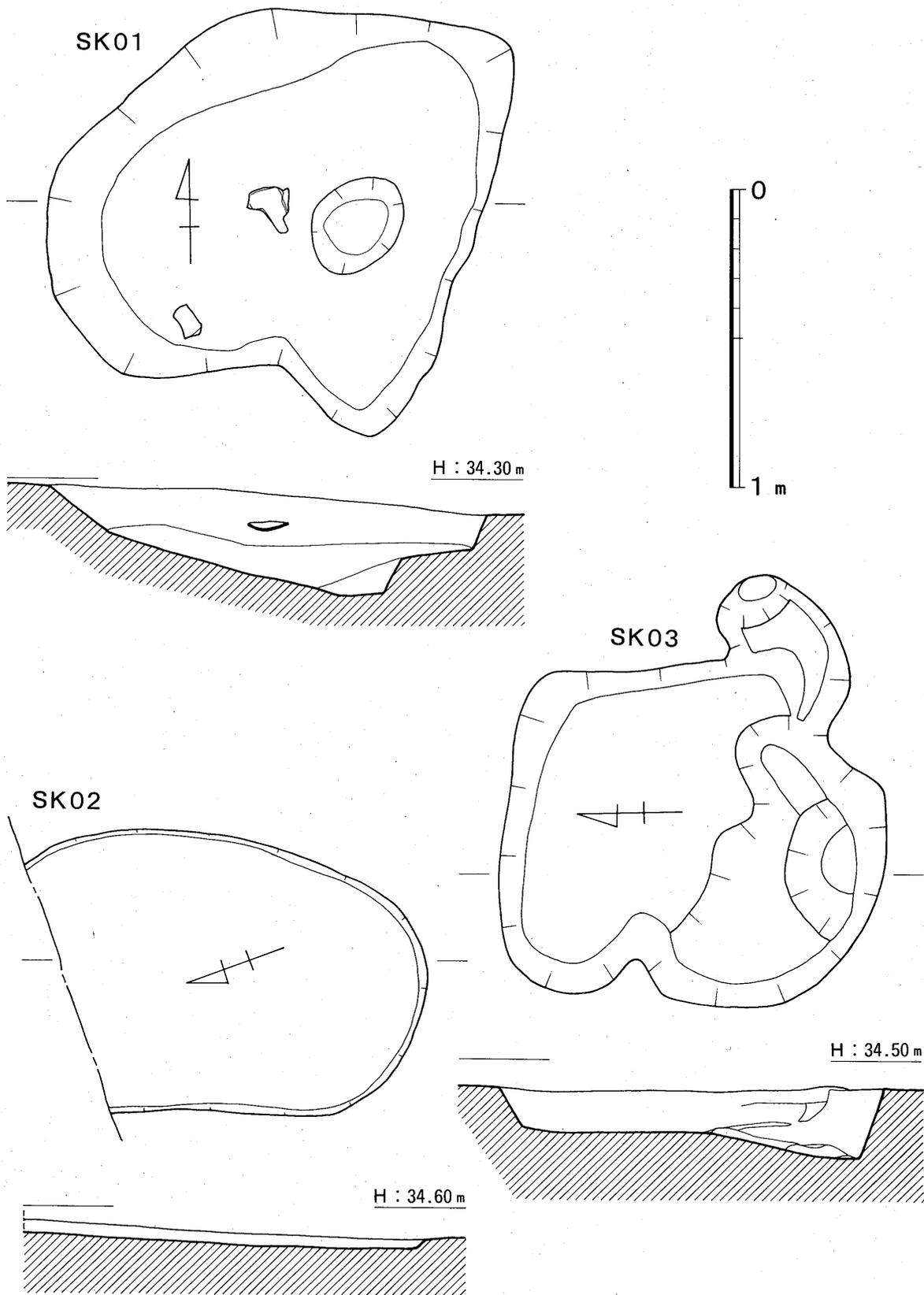
丸底杯 (2~4、6~7) 2~4は口径15.4~16.6cmの大きさのもので、体部にゆるやかな稜を持ち、口縁端部をやや外反させるものである。4の体部下半には押し出し時に付いたと思われる指頭痕が見られる。内面はミガキ、外面上位はヨコナデ、下位はナデである。6・7は高台の付くもので、調整は基本的に変わらない。

脚部 (5) 大型の椀のような器種とも考えられるが、定かではない。色調が淡いピンク系の色を呈し、他の土師器と違っている。ヨコナデ、ナデで仕上げる。

甕 (9) 15×16cmほどの破片である。淡橙灰色を呈し、外面の一部はやや赤味がある。白色砂粒を比較的多く含むものである。口縁部を外側に巻き込むように折り込むのが特徴である。色調、胎土、口縁部から朝鮮系無文土器と思わせるものであるが平安時代の甕としてもおかしくない。(註1)



第4図 SB01、SK01出土土器実測図 (1/3、1/6)



第5图 土坑实测图 (1/20)

黒色土器

椀(8) 高台付近の小破片で、内面だけ黒色化したA類である。内面にはミガキ、外面にはヨコナデが見られる。

SK02 (第5図)

SK01の西約9mの地点で検出されたもので、一部は発掘区外に出る。楕円形を呈し、長軸長1.3m以上、短軸長0.9m、深さは4.0cmほどと浅い。床面はほぼ平坦である。

土師器小破片1片が出土したが、実測不可能である。

SK03 (第5図、図版3-(3))

SK02の西約11mに位置する。不整形を呈する。床面は北側が平坦で、南側は凹凸がある。南東部のふくらんだ部分を除くと、南北長約1.25m、東西長約1.15mで、深さは北側が約15cm、南側の最も深い所が約23cmを測る。

出土遺物はビニール袋1袋ほどで、須恵器、黒色土器が少量の他は土師器がほとんどである。しかし、いずれも小破片で図示することができなかった。

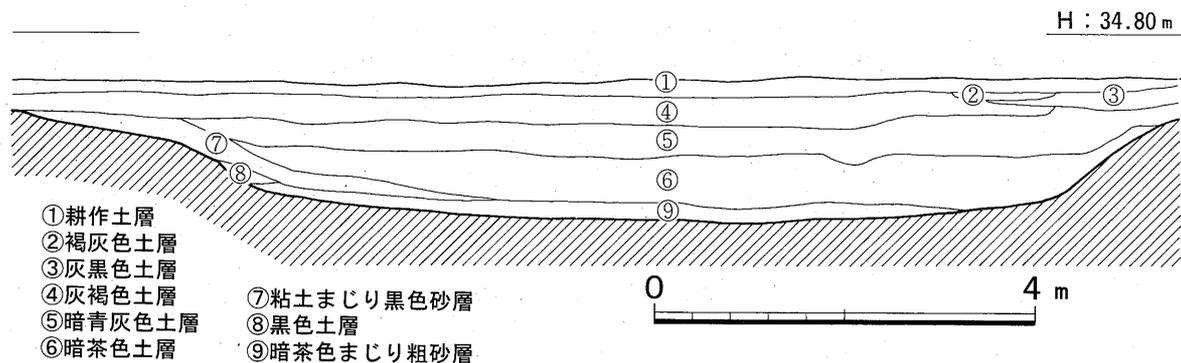
iii. 溝状遺構

SD01

発掘区の東側にあり、東南から北西方向にほぼ直線的に延びる溝である。幅約70cm、深さ3~4cmの浅いものである。遺物は須恵器、土師器、陶磁器の小破片が少量出土したが、図示できるものはなかった。

SD02

発掘区の中央部で検出されたもので、南南西から北北西に延びる溝である。幅は40~50cmほどであるが、一部ふくらむ部分がある。深さは南端部で3cmと浅く、北端部で約20cmとなり、南から北へ行くにつれて深くなる。現在の川の流れと合致している。SD01を切る。遺物は少量である。土器は土師器、須恵器であるが、図示できるものはなかった。土師器の杯片はいわゆる丸底杯の破片



第6図 SD02土層断面実測図 (1/80)

と考えられる。他に鉄刀子が1本出土している。

出土遺物（第10図、図版6）

鉄刀子（1） 切先を欠き、現存刃部長約8.3cm、最大幅1.7cm、背部の厚さ4mmを測るものである。茎と刃部背部が直線にならないのが特徴である。

SD03

SD02の西2mに位置し、おおよそ南北方向に延びる。しかし、北側は発掘区外に入り、検出されたのは長さ約1.3m分ほどである。幅は北端部が約50cmであるが、その他は40cmほどである。また、深さは約15cmである。出土遺物は少量で、土師器小片のみである。図示できるものはなかったが、板状圧痕のある杯底部破片が含まれている。

SD04（第6図、図版4）

発掘区最東端で検出されたもので、おおよそ南北方向に延びる溝である。発掘区東側に接して現在使用中の水路があるため、溝の東岸側をきちんと掘り出すことはできなかったが、小トレンチ等によりその位置を確認した。上端幅はあまり変わらないが、中段から、底部にかけては南側が狭く、北が広い。上端で最も広い所で11.8mを測る。底部幅は2.5～5.5mである。深さは最も深い所で約1.2mである。埋土はおおむねレンズ状の推積状況を示す。底部から2番めの層である第6層暗茶色土層は有機質を多く含み、日光に当たるとすぐ黒色に変色する土層であるが、約50cmの厚さで推積し、土器を多く含む。また、底は砂礫層で湧水が激しかった。

出土遺物は比較的多く、整理箱で約5箱分あった。残りが良く、大きめの破片が目立った。土師器が約8割を占めるが、黒色土器、瓦器、そして少量ながら陶磁器も含まれている。ほとんどが前述の第6層と、底部直上の第9層からの出土である。

出土遺物（第7・8図、図版5）

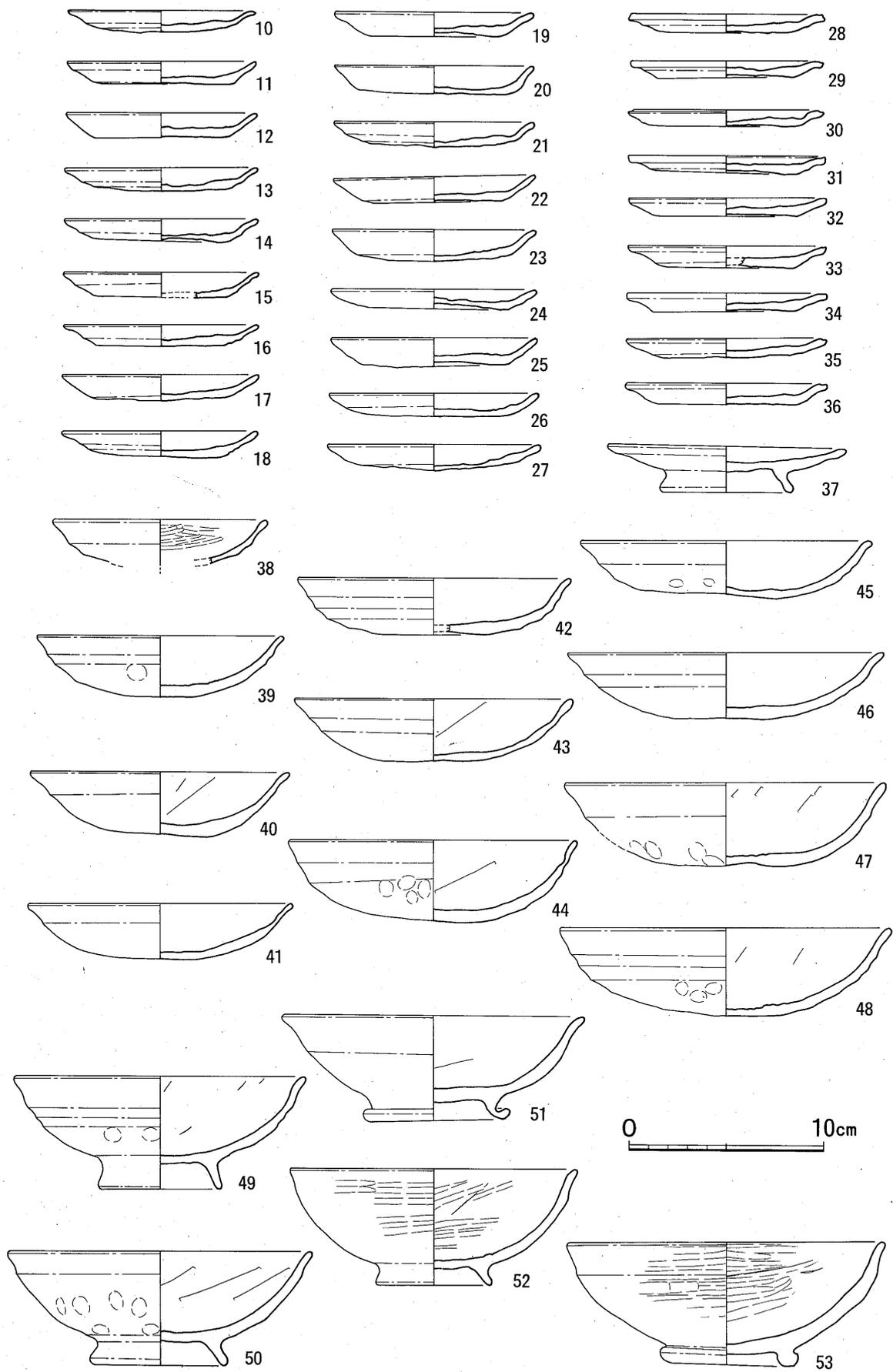
土師器

小皿（10～36） 口径9.6～10.9cmの大きさである。口唇部が丸く終わるもの（10～27）と、沈線状に若干凹むもの（28～36）がある。また、やや器高の高いもの（20、23）もある。底部は基本的にヘラ切り後未調整か、かるくナデるもので板状圧痕のあるものが多い。体部は内面中央付近を不定方向にナデる以外ヨコナデを行う。

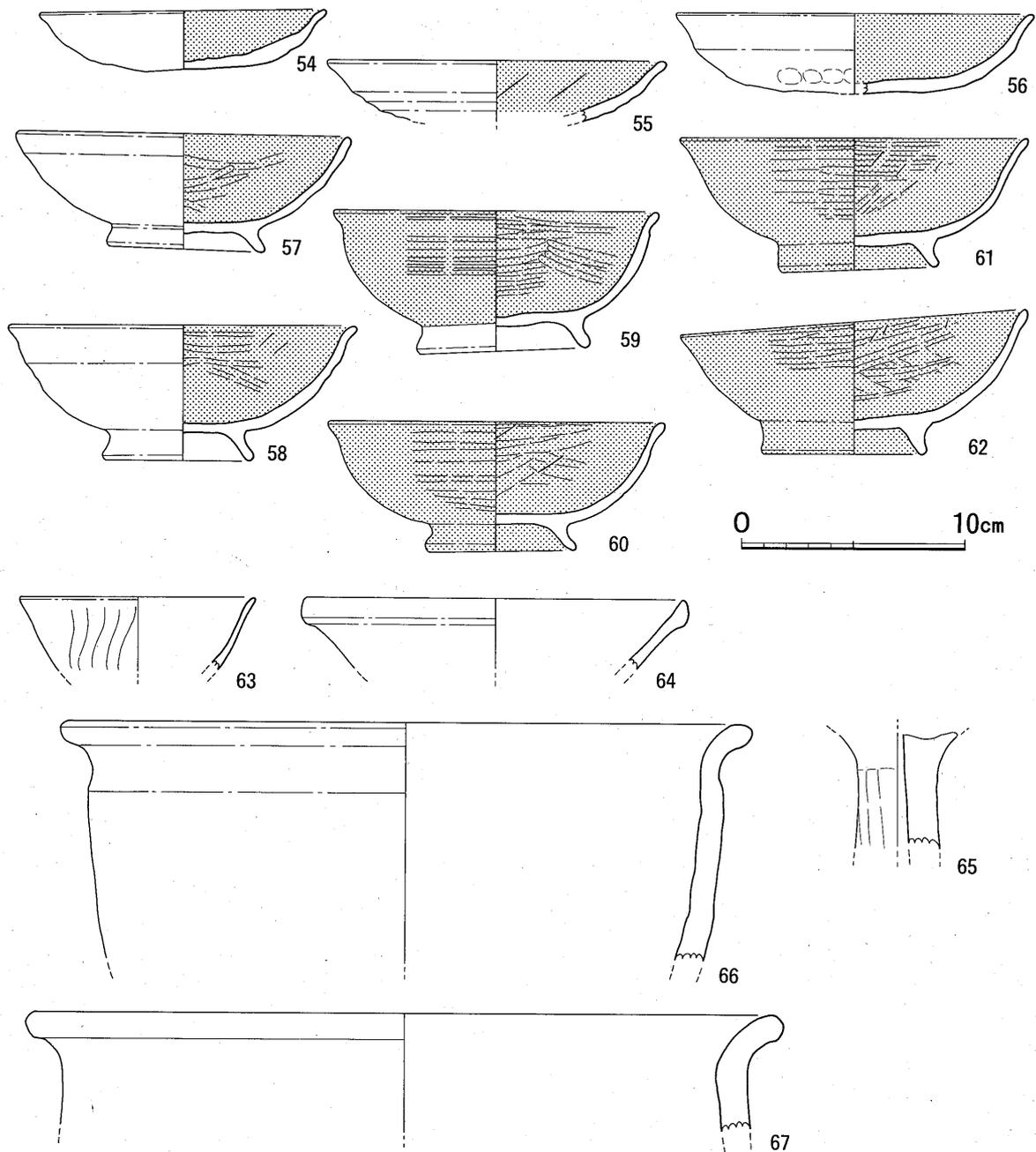
脚付皿（37） 小皿と違い底部から直線的に延びた体部は屈曲せずにそのまま終わる。脚も直線的に外に開く。調整は小皿と変わらない。

杯（38） 小破片からの復元である。あるいは高台の付くものかもしれない。内面はミガキを行っており、一部黒色化している。ミガキは丸底杯のミガキのように「単位」の判別しにくいものではなく幅のわかる横、または斜め方向のミガキである。太宰府市教育委員会で分類しているミガキCに当たるものであろう。

丸底杯（39～51） 39～48は口径12.6～17.0cmの大きさのもので、体部中位にゆるやかながら1～3条の稜が入る。体部下位には指頭痕の残るものがある。内面はミガキでコテあての残るものがある。



第7图 SD04出土土器实测图① (1/3)



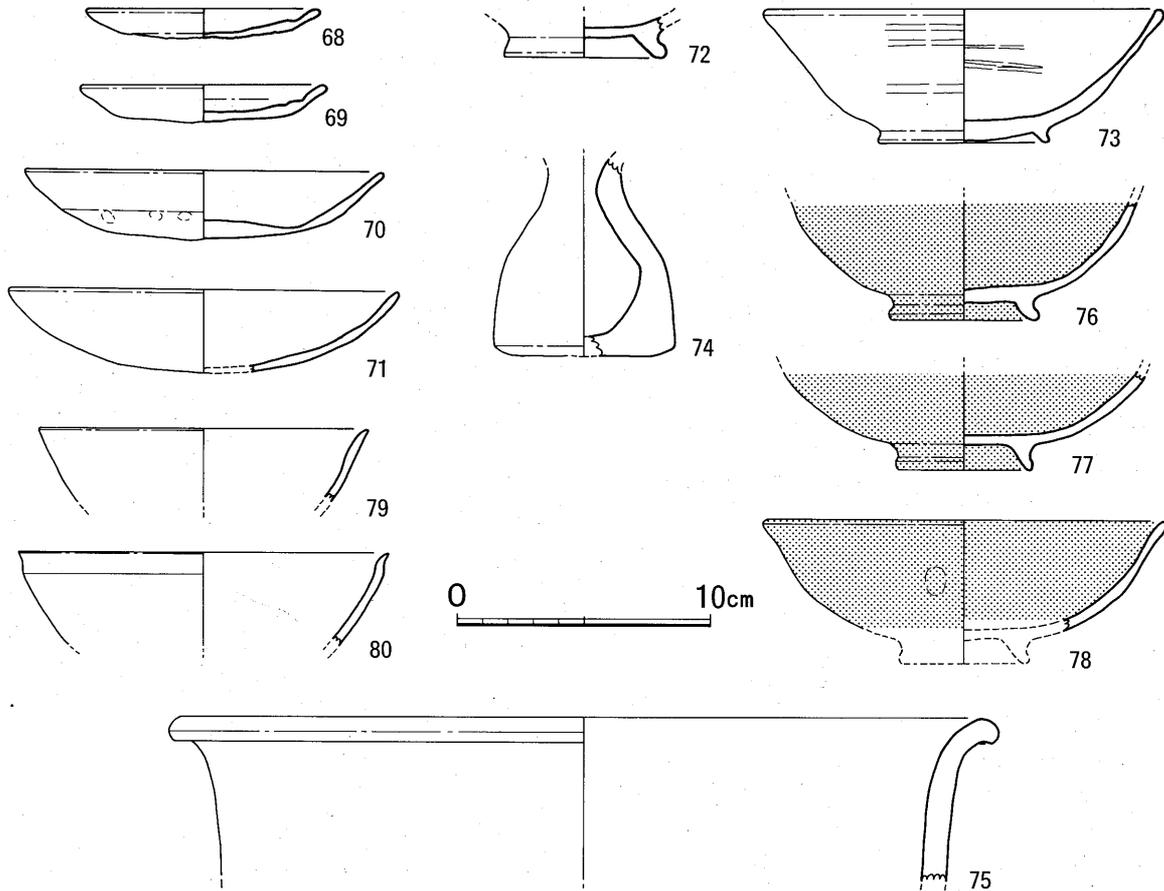
第8図 SD04出土土器実測図② (1/3)

る。ミガキはヨコナデの上に行われており、底部付近には完全にはミガキきれず、渦状にヨコナデの残るものもある。外面は稜より上がヨコナデ、下位がナデである。49～51は上記丸底杯に高台を付けたものである。49・50と51では高台の形態にだいぶ差があるが、全体の調整は変わらない。

椀 (52～53) 高台を付す点では49～51と変わらないが、やや深味があることと、ミガキの様相が違う。即ち、外面までミガキを行い、そのミガキも38と同様に横、斜めに行った様子が観察できるものであり、全面を平滑にしてしまう丸底杯のミガキとは区別される。

脚部 (65) 一見すると高杯の脚のようにも見えるが、内面の穴が芯棒を通してあけたような形状を示し、奈良時代までの高杯とは様相を異にする。器台かもしれない。

甕 (66, 67) いずれも小破片からの復元である。短く外反する口縁部を持ち、最終調整は内外面



第9図 S X01出土土器実測図 (1/3)

ともヨコナデである。67の外表面は黒色を呈するが、煤によるものではないかと思われる。

黒色土器

丸底杯 (54~58) 高台の付くものと付かないものがあるが、いずれも内面が黒色化されているA類で、内面にミガキがある。

椀 (59~62) 前者よりも深い椀で、内外面ともに黒色化されたB類である。

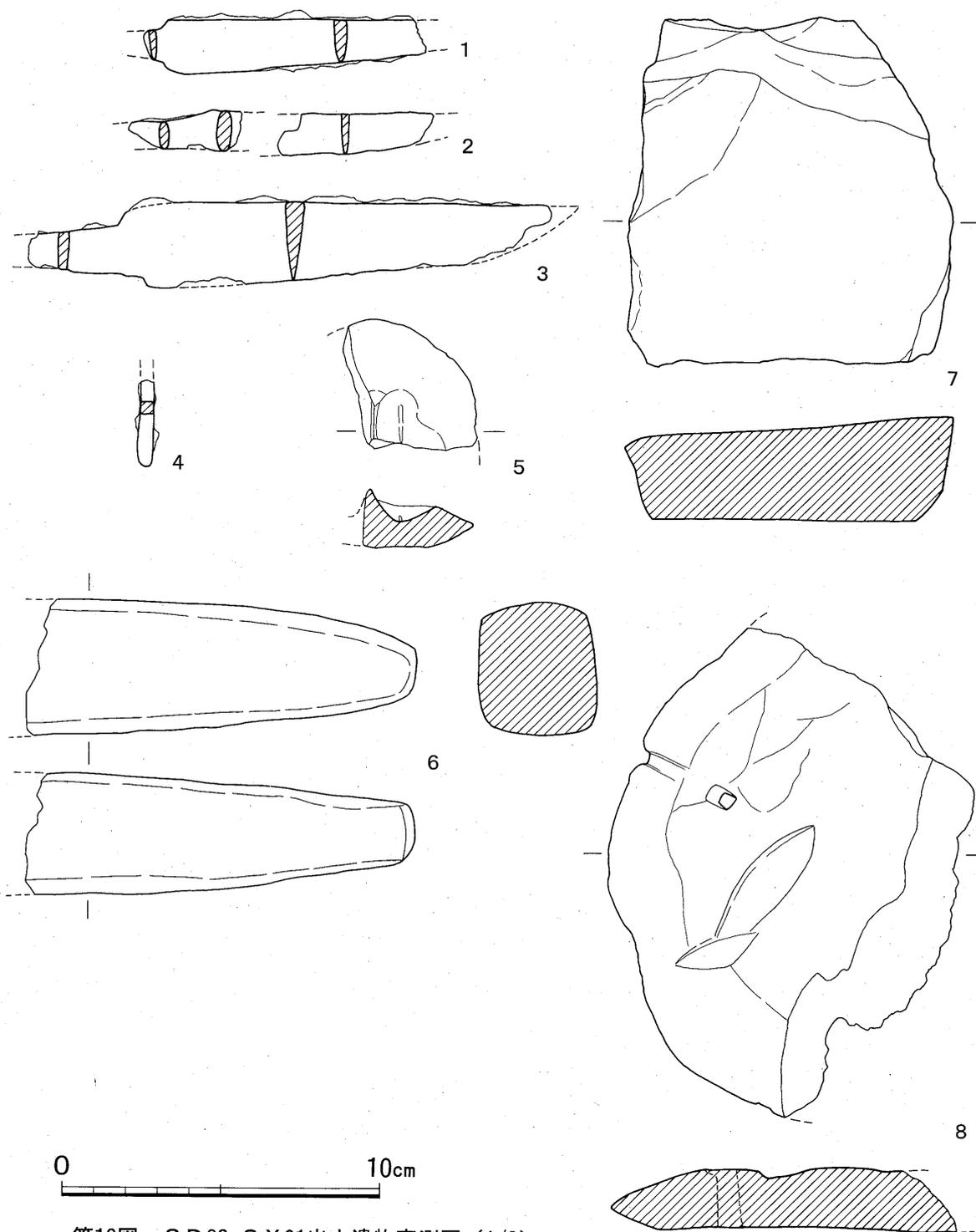
陶磁器

椀 (63, 64) 63は白磁で、明乳灰色の素地に半透明の釉が内外にかけられている。64も白磁で玉縁の付くものである。63よりはやや濃い目の乳灰色の素地に緑がかった半透明の釉がかかる。玉縁の下端部分が厚いが、その少し下の部分はかかからない点から見て下半分は露胎となるものであろう。

iv. その他の遺構と遺物

S X01 (図版2-(1))

発掘区中央部を、おおよそ東西に延びる遺構である。東側の大きな土坑状の遺構と西側の溝状の遺構が切り合い関係にあるととれるが、調査時には埋土の違い等が見られず、1つの遺構として調査したものである。東側は東西約14m、南北約4m以上の長方形状を呈し、その北西隅に西北西に延びる溝状遺構が続く形となる。長方形部は深さ15~20cmで、床面には土坑状の落ち込みや小ピットがある。前者の深さは最深部で約13cmと浅いものである。ピットは深さ15~30cmである。溝状部



第10図 SD02、SX01出土遺物実測図 (1/2)

は最大幅約3m、深さ約0.3mである。北西端で消える。

出土遺物は整理箱で4箱分ほどあり、土師器が最も多く、黒色土器、陶磁器が少量含まれる。他に棒状土製品、瓦があるが、土器は総じて小片で磨滅したものが多い。破片の大きいSD04に比べて様相が異なる。石器には砥石などがあり、鉄器として刀子が上げられる。

出土遺物 (第9・10図、図版5・6)

土師器

小皿 (68・69) 68は丸味があって底部と体部の境がはっきりしないもの、69はやや明瞭なもので

ある。底部はヘラ切り後ナデ、体部内外面はヨコナデ、底部内面は不定方向のナデを行う。

丸底杯 (70・71) 71は内外面とも丸味を持ち、70は内面を見ると底部と体部がやや明瞭である。調整が見えにくい、内面はナデのあとミガキが入るものと思われる。70には底部を押し出した際に付いたと思われる指頭痕が残る。

椀 (72・73) 72は底部のみ、73は形態から丸底杯とはやや異なるようなので、別にした。72の底部内面はミガキである。73は内外面とも暗褐色を呈し、両面ともミガキである。高台が低い。

壺 (74) お厚い作りで手づくねと思われる。頸部内面にはシボリ痕が入る。外面はナデである。外面淡橙灰色、内面灰黒色を呈する。

甕 (75) 口縁部のみの小破片である。内外面ともにヨコナデである。

黒色土器

椀 (76~78) すべて内外面とも燻すB類である。われ口を見ると内面も黒色化している。丸味を持った体部と比較的高い高台から成る。78に見られるような指頭痕を持つものがある。内外面ともミガいて平滑にしている。

陶磁器

白磁椀 (79・80) いずれも小破片であるが、80は口縁部下に強いヨコナデの結果によるものと思われる稜がつく。乳灰色の素地に半透明の釉がかかる。

鉄器 (第10図、図版6)

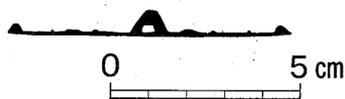
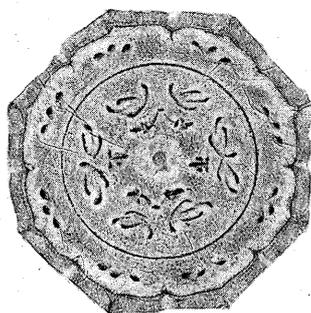
刀子 (2・3) 2は2個体にわれているが同一個体と思われる。ただし茎側刃部の厚味がある。刃部の幅1.3cm、背の厚さ2.5mmである。3は切先と茎の端部を欠くと思われるが、現存長16.4cm、刃部最大幅2.7cm、厚さ6mmの大きさである。関が刃側だけではなく背側にもある。

鏃 (4) 茎部分のみと考えられる。長さ2.7cm、断面4×4mmの大きさである。

土製品 (第10図、図版6)

模造鏡 (5) 指でつまみ出して鈕を作りだした模造鏡と考えられる。淡橙灰色を呈したもので、全体の4分の1程度が残存しているものと思われる。

棒状土製品 (6) 断面方形を呈し先端部が細まる形態を示す。おそらく反対側も同様な形になるものと思われる。淡橙灰色を呈し、二次焼成を受けた形跡などは認められない。北九州市で報告されているヘラ状土製品に当たるものと思われる。^(註3)



石製品 (第10図、図版6)

砥石 (7) おおよそ10.9×10.2cm、厚さ3.3cmの大きさで、広い面の裏表が使われている。

不明石製品 (8) 滑石製である。円板状をしたものの3分の1程度の破片と思われるが、端部(図の左側)がにぶく研ぎ出されて刃のようになっている。一孔を穿ち、その左側の端部にくり込みが入れられている。石鍋の底部の再利用とも考えられ

第11図 八稜鏡拓本・実測図 (1/2) るが用途は不明である。

八稜鏡 (第11図、図版6)

遺構検出作業中にSD01の西側で出土したものである。検出面までの基本的層序は、①耕作土(20cm)、②黄褐色の床土(5cm)、③暗褐色砂質土層(13cm)と続き、暗灰色シルト層の検出面に至る。八稜鏡は③層最下部付近で出土した。

長径8.3cm、短径7.4cm、厚さ1mmである。水平面に鏡背を上にして置くと縁がやや浮き、鏡面が完全に水平ではないことがわかる。模様はかなり鮮明であるが、抽象化が進み何を表すものかは定かでない。細かい圏線によって内区と外区に分かれる。外区には3個セットの珠文状の模様が8組配されている。本来は草花文状のものではないかと思われる。内区には鈕をはさんで相対する位置に同じ模様が2組配される。これも判然とはしないが、本来は花鳥文様のようなものと思われる。

〈註1〉 太宰府市教育委員会山本信夫氏のご教示による。

〈註2〉 『太宰府条坊跡Ⅱ』太宰府市教育委員会 1983

〈註3〉 『森山遺跡』(財)北九州市教育文化事業団 1994

IV. ま と め

1. 遺構の年代について

SB01

出土遺物は少なく、また小破片のため決定しにくいですが、図示した小皿は復元口径が10.0cmほどあり、法量的には太宰府山本氏編年によればXI期(11世紀中頃)に含まれると思われる。

SK01

出土した丸底杯は体部中位にゆるやかな稜を有し、やや深めで、口縁端部はわずかに外反気味である。これらの特徴は山本氏編年によればやはりXI期(11世紀中頃)に当てはまると考えられる。

SD04

出土した土師器を見ると糸切りは1点も含まれず、へら切りのみである。器種ごとに見ていくとまず、口縁端部が丸く終わる小皿aは口径9.6~10.9cm、口唇部に浅いU字形の沈線が入る小皿a2は9.7~10.3cm、器高は1.5cm以下である。小皿a2は1cm未満が多い。また、丸底杯は口縁端部がやや外反するものと、外反せず丸く終わるものがある。黒色土器碗についても口縁端部に同様な特徴がある。これらは、山本氏編年によればXI期(11世紀中頃)とXII期(11世紀後半~12世紀初め頃)のものにとらえられる。次に磁器について見れば、白磁片が出土しているが、第8図63がV類、64がIV類に含まれ、山本氏編年によれば磁器区分のC期(11世紀後半~12世紀前半)に分類される。以上のことよりSD04は11世紀後半~12世紀前半頃のものと考えられる。

SX01

出土した土師器については、まず小皿はaのみで、口径9.2cm、9.7cmと小さめである。丸底杯はSK01出土土器に比べやや浅めで、体部中位の稜もはっきりしない。さらに口縁端部は外反せずに

丸く終わる。これらの特徴は山本氏編年のXIII期に当たるものであろう。次に磁器は白磁のみで、図示したものは森田、横田氏分類のV類に属し、山本氏の磁器区分のC期（11世紀後半～12世紀前半）に当たる。なお他にも磁器片が出土しているがすべてC期に含まれるものである。従ってSX01はこれから11世紀後半～12世紀前半のものと考えられる。

2. 八稜鏡について

出土した八稜鏡は比較的鑄上がりの良いものであるが、文様は抽象化が進み区別の困難な鏡で、儀鏡と分類されるものである。^(註4)八稜形という形にのみ注目して県内の出土例を見ると表1のようになる。遺漏もあると思われるが、10遺跡11例が知られる。やはり大宰府並びにその周辺に多い。また、遺構については墳墓のみである。この点、東日本では祭祀遺構出土例が多く、西日本では墳墓出土例が多いという杉山洋氏の指摘通りである。^(註5)時期的には9世紀後半頃から12世紀後半頃までと幅があるが、ほぼ平安時代全体にわたっている。基本的な用途としては、古墳時代の鏡のように威信財としてではなく、鏡本来の用途である化粧道具として使われたと考えられている。^(註6)博多出土例の湖州八稜鏡は櫛やはさみなどと共に木箱に収められた状態で出土しており、端的にそれを示している。ただし、文様が著しく簡略化され、銅質も悪く、奉納や埋納を目的に製作された鏡もあり、それらが儀鏡と呼ばれる。^(註7)本遺跡出土鏡も文様的には儀鏡に分類されるものであろうが、鑄上がりが良く、鏡としての機能も充分であると思われる。

3. 遺跡の性格について

本遺跡は低丘陵の間の谷間に立置していて、居住には適さない場所であるのに、溝だけでなく少ないながらも掘立柱建物や土坑等も検出された。本遺跡の北約200mには5世紀後半～12世紀頃までの大規模な集落である上園遺跡があり、^(註8)条件の悪い本遺跡に住む理由はないように思われる。ここで図版6-A Bに示すような土師器に注目してみたい。これらは土師器と考えたが、黒色化した部分はミガかっている場合もあり、本来は黒色土器として焼あげようとした「失敗品」ではなかったろうか。^(註9)これらの他にも土師器か黒色土器か迷うようなものもあり、近くにありながら大宰府の出土土器とは若干違う感じがある。資料数が少なく、確実なことは言えないが失敗品という想定が正しいなら、遺構としては検出されなかったが、土師器や黒色土器を焼成した遺跡の可能性が考えられる。本遺跡を含む上大利、牛頸地区は牛頸窯跡群として著明な地域である。同窯跡群は6世紀中頃から9世紀初頭頃まで須恵器を焼いていたが、今年度の調査で10世紀前後と考えられる土師器、黒色土器更には須恵器も焼いていた可能性のある窯跡が見つかった。場合によっては、この地域が連続と続く土器作りの伝統を持った一帯ということもあり得るかもしれない。少なくとも今後はそのような視点を持って調査に臨まなければならないと考える。

最後に、八稜鏡の保存処理をしていただいた九州歴史資料館参事補佐横田義章、遺物整理に関して種々のご教示をいただいた福岡市文化財部長後藤直、同埋蔵文化財課課長山崎純男、同係長横山邦継、同山口譲治、I章で上げた太宰府市教育委員会の技師諸氏に対し、厚く感謝の意を表したい。

- 〈註1〉 山本信夫「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』 1988
- 〈註2〉 〈註1〉に同じ
- 〈註3〉 横田賢次郎、森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集 4』1978
- 〈註4〉 杉山洋「今様の鏡と古鉢の鏡」『ミュージアム』東京国立博物館 No.481 1991
- 〈註5〉 註4に同じ
- 〈註6〉 註4に同じ
- 〈註7〉 註4に同じ
- 〈註8〉 『上園遺跡Ⅰ』・『上園遺跡Ⅱ』大野城市教育委員会 1986、1987
- 〈註9〉 秋山浩三「キズモノの土器」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要2』 1994

表1. 福岡県内八稜鏡出土遺跡地名表

(ϕ 最大径、s 最小径)

No.	遺跡名	市町村名	種類	法量	出土遺構	共伴遺物	時期	文献
1	津古内畑遺跡	小郡市	端花双鳳八稜鏡		土坑墓	瓦質高台付椀、土師器杯8、椀1、壺1、銅鈴	平安末	①
2	門田遺跡	春日市		ϕ 7.3 s 6.65	木棺墓	鉄製紡錘車、刀子釘24、土師器壺1、椀7、皿6	10C後半	②
3	飯盛吉武遺跡	福岡市	双鶴八稜鏡					③
4	博多	福岡市	湖州八稜鏡	17.2	木棺墓	化粧箱(櫛、鈇、櫛払い、刷毛)青磁椀1、皿4、土師器皿・杯	12C中～後半	④
5	海の中道遺跡	福岡市	唐草文双鳳八稜鏡	9.2	包含層			⑤
6	御笠川南条坊遺跡	太宰府市		7.6	上層遺構面			⑥
7	大宰府跡	太宰府市	端花双鸞八稜鏡	7.6	茶灰色土層			⑦
8	宮ノ本遺跡	太宰府市	四仙騎獣八稜鏡	ϕ 11.5 s 10.0	木棺墓	黒色土器鉢1、釘	9C後半前後	⑧
9	宮ノ本遺跡	太宰府市	端花双鳥八稜鏡	9.5	木棺墓	鉄製紡錘車、刀子、釘22、土師器鉢1	"	⑨
10	小水城周辺遺跡	大野城市		ϕ 8.3 s 7.4	遺構面			⑩
11		伝福岡県出土	端花鴛鴦八稜鏡	13.0		経塚	平安後期	⑪

文献

- ①. 『津古内畑遺跡第3次(遺構編)』福岡県教育委員会 1972
- ②. 『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集』福岡県教育委員会 1977
- ③. 『古鏡の美』福井県立博物館 1986
- ④. 『博多(都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ)』福岡市教委 1988
- ⑤. 『海の中道遺跡Ⅱ』朝日新聞社西部本社、海の中道遺跡発掘調査実行委員会 1993
- ⑥. 『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第6集』福岡県教育委員会 1977
- ⑦. 『大宰府史跡平成元年度概報』九州歴史資料館 1990
- ⑧. 『太宰府佐野地区遺跡群Ⅳ』太宰府市教育委員会 1993
- ⑨. 『太宰府佐野地区遺跡群Ⅴ』太宰府市教育委員会 1995
- ⑩. 『小水城周辺遺跡Ⅰ』大野城市教育委員会 1995
- ⑪. 『青銅鏡』神戸市立博物館 1995

表2. 法 量 表

No.	遺構	種類	器種	法量 (cm) ①口径 ②器高 ③高台径	No.	遺構	種類	器種	法量 (cm) ①口径 ②器高 ③高台径
1	S B01	土師器	皿	①(10.0) ②1.0	41	S D04	土師器	丸底杯	①(13.6) ②2.9
2	S K01	"	丸底杯	①(15.2) ②3.3	42	"	"	"	①(14.0) ②3.0
3	"	"	"	①(15.4) ②3.9~	43	"	"	"	①14.3 ②3.3
4	"	"	"	①(16.6) ②4.0	44	"	"	"	①14.9 ②4.3
5	"	"	脚部	②3.7~ ③9.3	45	"	"	"	①(15.0) ②3.0
6	"	"	丸底杯	②2.5~ ③6.6	46	"	"	"	①16.2 ②3.6
7	"	"	"	①(14.6) ②5.1 ③7.0	47	"	"	"	①16.5 ②4.3
8	"	黒色土器	椀	②2.1~ ③6.7	48	"	"	"	①17.0 ②4.6
9	"	"	甕	②14.3~	49	"	"	"	①(15.0) ②5.9 ③(6.4)
10	S D04	土師器	皿	①9.6 ②1.2	50	"	"	"	①15.6 ②6.0 ③7.1
11	"	"	"	①9.7 ②1.3	51	"	"	"	①(15.6) ②5.6 ③7.6
12	"	"	"	①(9.8) ②1.3	52	"	"	椀	①14.7 ②6.0 ③(5.0)
13	"	"	"	①9.9 ②1.3	53	"	"	"	①(16.4) ②6.4 ③7.2
14	"	"	"	①9.9 ②1.3	54	"	黒色土器	丸底杯	①12.8 ②2.8
15	"	"	"	①10.0 ②1.3	55	"	"	"	①(15.2) ②2.7~
16	"	"	"	①10.0 ②1.2	56	"	"	"	①15.9 ②3.6
17	"	"	"	①10.1 ②1.4	57	"	"	"	①15.0 ②5.3 ③7.1
18	"	"	"	①10.1 ②1.4	58	"	"	"	①15.6 ②6.1 ③6.8
19	"	"	"	①10.2 ②1.2	59	"	"	椀	①14.6 ②6.5 ③7.8
20	"	"	"	①10.2 ②1.5	60	"	"	"	①15.1 ②5.9 ③6.8
21	"	"	"	①10.3 ②1.4	61	"	"	"	①15.6 ②6.1 ③7.3
22	"	"	"	①10.4 ②1.4	62	"	"	"	①(15.6) ②6.6 ③7.4
23	"	"	"	①10.5 ②1.7	63	"	白磁	"	①(10.6) ②3.3~
24	"	"	"	①(10.6) ②1.1	64	"	"	"	①(17.4) ②3.2~
25	"	"	"	①(10.6) ②1.6	65	"	土師器	脚部	②5.3~
26	"	"	"	①10.7 ②1.2	66	"	"	甕	①(31.0) ②10.7~
27	"	"	"	①10.9 ②1.4	67	"	"	"	①(34.0) ②5.4~
28	"	"	"	①9.8 ②1.0	68	S X01	土師器	皿	①(9.2) ②1.2
29	"	"	"	①9.9 ②1.0	79	"	"	"	①(9.7) ②1.5
30	"	"	"	①(10.0) ②0.9	70	"	"	丸底杯	①14.1 ②2.8
31	"	"	"	①10.0 ②1.0	71	"	"	"	①(15.4) ②3.4
32	"	"	"	①10.1 ②1.0	72	"	"	椀	②1.7 ③(6.4)
33	"	"	"	①10.2 ②1.2	73	"	土師器	"	①(15.8) ②5.3 ③6.8
34	"	"	"	①10.3 ②1.5	74	"	"	壺	①7.9~
35	"	"	"	①10.3 ②1.0	75	"	"	甕	①(32.8)
36	"	"	"	①(10.3) ②1.1	76	"	黒色土器	椀	①4.8~ ②6.0
37	"	"	脚付皿	①(12.3) ②2.5 ③6.9	77	"	"	"	①4.0~ ③5.4
38	"	"	杯	①(11.0) ②2.3~	78	"	"	"	①(15.9) ②4.4~
39	"	"	丸底杯	①(12.6) ②3.2	79	"	白磁	"	①(13.0)
40	"	"	"	①(13.2) ②3.4	80	"	"	"	①(14.5) ②3.7~

圖 版



(1) 調査地全景（東から）



(2) 調査地と小水城



(1) S X01



(2) 八稜鏡出土状態



(3) S B01

(1) 調査区西側全景 (西から)



(2) SK01



(3) SK03

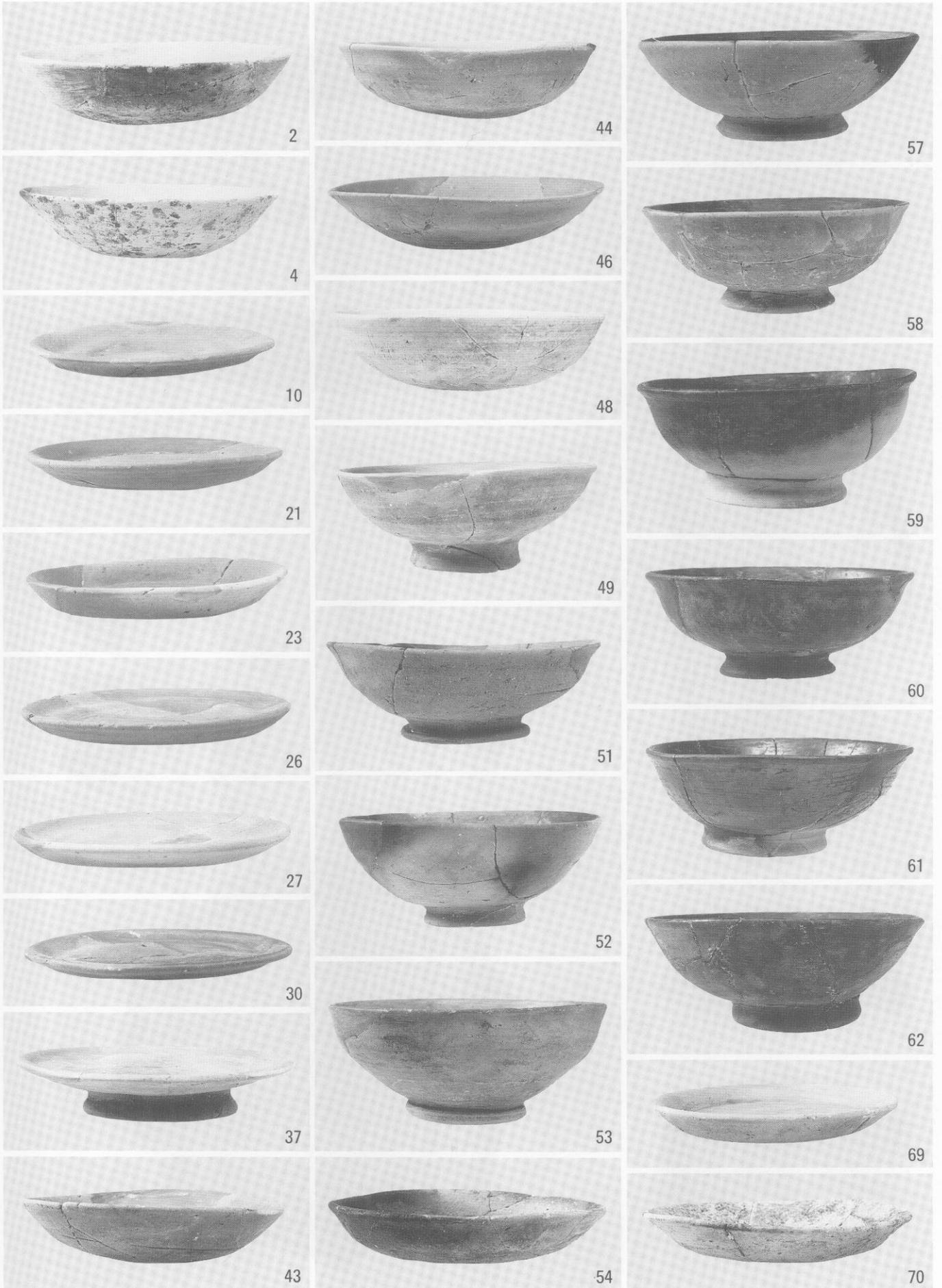




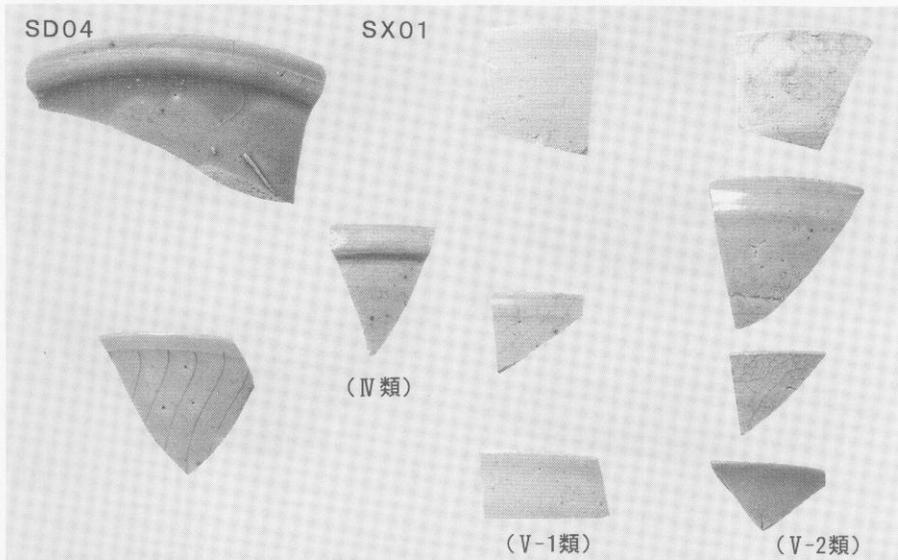
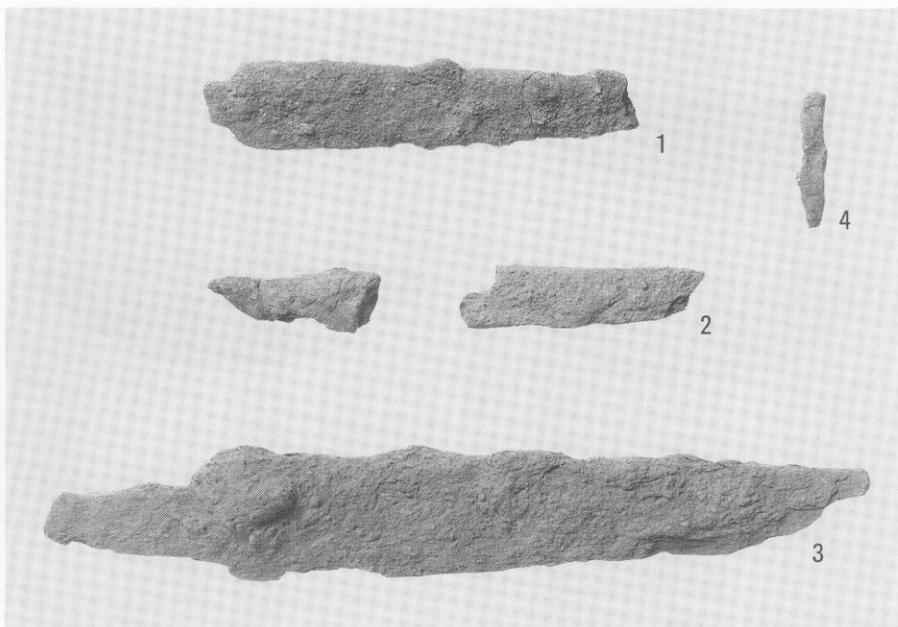
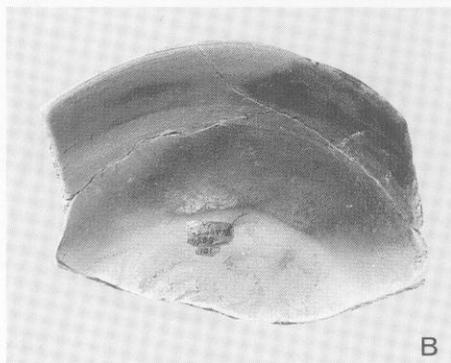
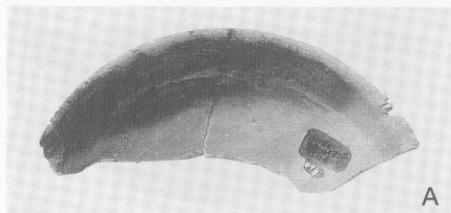
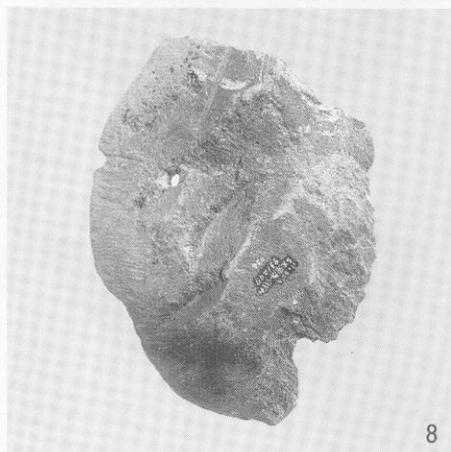
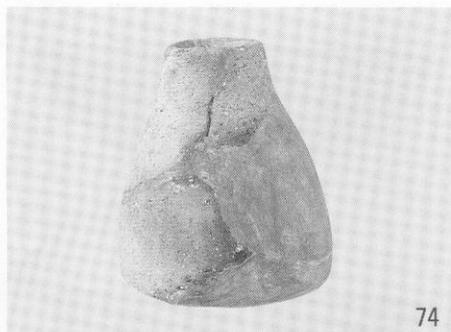
(1) SD04 (西から)



(2) SD04 埋土断面 (南から)



出土遺物 1



出土遺物 2

報 告 書 抄 録

ふりがな	しょうみずきしゅうへんいせき							
書名	小水城周辺遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第45集							
編著者名	舟山 良一							
編集機関	大野城市教育委員会							
所在地	〒816 福岡県大野城市曙町2-2-1 TEL 092-501-2211							
発行年月日	西暦 1995年12月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しょうみずき 小水城 しゅうへんいせき 周辺遺跡	ふくおかけん 福岡県 おおのじょうし 大野城市 あさひがおか 旭ヶ丘			33° 30' 32"	130° 29' 10"	1993.11.26 } 1994. 1.12 1995. 3. 6 } 1995. 3.23	1,000m ²	県道拡幅
所収遺跡名	種名	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小水城周辺 遺跡	集落	平安	掘立柱建物 土坑 溝	土師器、黒色土器 青白磁 八稜鏡				

大野城市文化財調査報告書

第 45 集

平成 7 年 12 月 25 日

発 行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2丁目2-1

印 刷 株式会社 三光
福岡市中央区大名1丁目2番20号